

のがナシヨナルな次元を疾うに超えた諸力に浸食され、断片化し流動化しつつある状況下で、向き合うべきローカリティとはなんであるかを考えたい。その際、われわれの認識と方法から抜け落ち、やり過ごされ、語りえなかったものの生き延び方の前衛性に着目する。

参考文献

ヴァルター・ベンヤミン

一九九五「歴史の概念について」「歴史哲学テーゼ」「ベンヤミン・コレクション①近代の意味」久保哲司ほか訳、筑摩書房

関根康正

二〇〇九「パッケージ化と脱パッケージ化との間での生きる場の創造、あるいは「組み換えのローカリティ」「資本としての知識」から「資源としての知識」への視点の移行がもたらすもの」関根康正編『ストリートの人類学 下巻』国立民族学博物館

ロー、ジェーンマリー

二〇一二『神舞い人形―淡路人形伝統の生と死、そして再生― 齋藤智之訳、私家版

※本シンポジウムの内容は、平成二十七―二十九年度にJSPS科
研費JP15K03066の助成を受けた研究（「人形芝居における儀礼
の復活と門付の伝統に関する研究―淡路人形芝居を中心として―
研究代表者・姜竣）の成果の一部である。

（かん・じゅん／京都精華大学）

【シンポジウム「ローカルなもの生き延び方―現代における人形儀礼の再文脈化」】

門付けの「継承」と「復活」のはざままで

―阿波徳島「三番叟まわし」の再興ともうひとつの記憶

森田 良成

はじめに

徳島県には「三番叟まわし」と呼ばれる門付け芸がある。四体の木偶（千歳、翁、三番叟、エビス）を木箱あるいは行李に入れて運びながら、正月に決まった家々を廻り、人形遣いと鼓打ちのふたりが一組となって「三番叟まわし」を舞うことで、新年の祝いを届ける。

一九六〇年代から七〇年代にかけて多くの芸人が廃業したことに伴い、三番叟まわしの歴史は一度は途絶えかけた「芝原生活文化研究所二〇一六、辻本二〇〇八」。「阿波木偶箱まわし保存会」（以下、保存会）は、「徳島県独特の祝福芸や門付け芸等の無形民俗文化財調査研究」を目的として一九九五年に発足し、この芸能を再興するための活動を展開して現在に至っている。「三番叟まわし」の門付けを二〇〇二年からは保存会が担っており、二〇一八年では新正月と旧正月を合わせて千軒以上の

家々を廻った。

保存会は、「阿波木偶箱まわし」を一連の芸能の総称として用いており、これを組織名称に採用している。「阿波木偶箱まわし」を構成する主な芸能としては、「三番叟まわし」と「箱廻し」のふたつが位置づけられている。保存会を組織し、現在はその顧問を務める辻本一英氏は、「三番叟まわし」と「箱廻し」とを混同した記述がしばしば見られるが、それは誤りだとしている。「三番叟まわし」は「神事」であり、一方の「箱廻し」は「娯楽」である。保存会はこの芸能の現在を、「継承した三番叟まわし」「復活させた箱まわし」として説明している「芝原生活文化研究所 二〇一六、辻本 二〇〇八」。

本稿ではまず、保存会の活動の中心に位置づけられている「三番叟まわし」の過去と現在が交差する姿を、これを迎える側の語りから浮かびあがらせる。そのうえで、「三番叟まわし」と「箱廻し」のどちらでもない、「物貰い」と同一視されたまま既に姿を消し、その後に保存会が「復活」させたもうひとつの門付けに着目する。芸能やその他のある「伝統」が再興していく過程においては、しばしば主流化と周縁化の二つのプロセスが同時に進行する。本稿では、三番叟まわしを復活させ継承していくこうとする活動がこれからさらに取り組むことになるであろう、このプロセスをめぐるひとつの問題を明らかにする。

一 概要と歴史

徳島の三番叟まわしは、次のような特徴もつ。¹⁾

- 一、木偶を操り、檀那場を廻って祝福を届ける門付芸である。
- 二、能の演目として知られる「式三番叟」と、「エビス舞」のふたつの芸をひと続きにして演じる。
- 三、「式三番叟」の三体（千歳、翁、三番叟）と「エビス舞」の一体（エビス）の計四体の木偶をひとりの演者が一体ずつ操る。
- 四、毎年正月元旦から旧正月までの間に、檀那場の家々を個別に訪問して演じる。
- 五、専門の芸人による芸能である。

三番叟まわし独特の特徴として強調される点が、「式三番叟」と「エビス舞」というもともとは別の二つの芸がひと続きに演じられることである。木偶ではなく人が演じる能において、「式三番叟」は演能時間が一時間にも及ぶ。これに対して三番叟まわしでは、廻壇先でのわずか十分ほどの短い時間に、まず「式三番叟」が無病息災と家内安全を祈り、続いて「エビス舞」が、農村では五穀豊稔を、漁村では大漁を、市街地では商売繁盛をそれぞれ予祝し、福を招く。三番叟まわしには、「式三番叟」本

来の祝福の舞がもつ崇高さと古い呪術性、「エビス舞」の福神としての役目の双方が保たれており、かつふたつが一続きに圧縮されて一体となっている「神野 二〇一七、辻本 二〇〇八」。しかもそれが門付けに訪れた先で「一軒ずつ惜しみなく演じられる、とてもぜいたくな芸能」である「神野 二〇一七・六六」。

三番叟まわしは、現在では徳島県を代表する民俗芸能のひとつとして認知され、正月の風物詩としての地位をたしかなものにしており、保存会もこれまでの功績を認められて数々の賞を受けている⁽²⁾。しかし三番叟まわしは「被差別民衆が築いた祝福芸」という歴史と、それゆえに「滅亡しかけた」過去を持つている「姜 二〇一八、辻本 二〇〇八」。辻本が一九九五年に阿波木偶箱まわし保存会を組織したそもその大きな動機も、差別と戦うことだった。正月に家々を廻り三番叟まわしを届けてきた芸人は、「福を届ける神の使いとして敬われながらも、日常では賤視に苦しまねばならなかった」人々であり、かつてその存続に「とどめを刺した」のは部落差別だった「姜 二〇一八・二〇八―二一三、辻本 二〇〇八・七五―七八」。一九七二年に徳島県で結婚差別をめぐる心中事件があり、これがマスメディアでショッキングに報じられた。保存会の調査は、事件と同じ年に三番叟まわし芸人の廃業の件数が集中していることを明らかにしている。「部落差別意識からくるマイナスのイメージと重なり、箱廻し芸人は子や孫が結婚や就職時に差別されるのであれば廃業しようと、木偶人形を押し入れに入れて封印した」の

であり、芸人たちは自分の子どもや孫が「えべっさんの子、物もらいの子」と差別されることを憂いて、多くの得意先を残したまま廃業した。辻本は、衰退の傾向はたしかに一九六〇年代からあったものの、三番叟まわしが「滅亡しかけた」ことの直接の原因はこうした部落差別であったと強調している。この心中事件後にも「三番叟まわし」を継続した芸人は二組のみとなり、一九九〇年代になると、ただひとりの「最後の三番叟芸人」が残るのみとなった。

大学卒業後に地元で高校教員となった辻本は、同和教育を担当する中で、被差別部落の歴史に根ざした「生きた教材の発掘」と「文化の再評価」に取り組むようになっていった。この取り組みの過程で、一九七九年に「高校生友の会」を結成するに至る。これが、箱まわし保存会の活動年譜においてその原点に位置づけられている「辻本 二〇〇八、芝原生活文化研究所 二〇一六」。活動を続ける中で、辻本は徳島における「独特の祝福芸・門付け芸」の存在に強く惹かれるようになり、一九九五年にその調査研究と「復活」を目的として「阿波木偶箱廻しを復活する会」を組織した。「阿波木偶箱まわし保存会」の直接の前身がこれである。

一九九七年に会員の中内正子氏（保存会現会長）が、翌年には南公代氏（現副会長）が、それまでの仕事をそれぞれ辞めて三十代で専業の芸人となった。保存会での調査を通して関係を築いていた「最後の三番叟芸人」に一九九八年秋に弟子入りを

認められると、中内は一九九九年から三年間、師匠の門付けに同行し、芸を身に付けていった。³保存会によるこの挑戦は、一九九九年にNHK徳島放送局が取り上げて放送した。同年十一月の徳島新聞では、一九五五（昭和三十）年当時の同新聞紙面に掲載された大きな白黒写真を再掲したうえで、保存会の取り組みを紹介してエールを送った（この写真については後述）。「最後の三番叟芸人」と呼ばれた師匠は、二〇〇一年の正月を最後に引退し、門付けの諸道具一式を会に寄贈した。翌二〇〇二年からは、檀那場を引き継いだ中内と南のふたりで門付けを担っている。

保存会は門付けを行うとともに、訪れた先の家々で老人たちから貴重な証言を集めて記録する作業を行い、それを毎年繰り返し蓄積してきた。保存会の活動は、祝福芸を届けるだけに留まらず、かつての芸人たちの旅のあり方を学び、明らかにして歩く旅でもあり、それは「途方もない大事業」であった。「神野 二〇一七・七五―七七」。新正月には一月一日から二十日ごろまでを毎日休みなく、また旧正月は初日から四日間を、都市部では一日におよそ五〇軒、山間部では三〇軒の家々を廻る。師匠自身が最後に門付けを行った二〇〇一年の時点で、廻壇先は徳島県西部と愛媛県の一部を合わせて合計一五〇〇軒あまりだったが、翌二〇〇二年に保存会がその一部を引き継いで三番叟まわしを届けたのは約八〇〇軒だった（辻本 二〇〇〇八・八二）。二〇一八年では、引き継いで以来最多となる一〇〇〇軒

を越える家々を廻った。

二 三番叟まわしを迎える人々

二〇一七年旧正月に辻本たちの案内で、筆者たち本特集のメンバーを含むグループが数軒の門付けに同行させてもらい、あわせて保存会との関係が特に深いという何軒かを紹介してもらって聞き取り調査を行った。⁴同年七月に、このうち三好郡東みよし町にある二軒を再訪して再度聞き取り調査を行い、さらに二〇一八年旧正月の当日（二月十六日）には、筆者が訪問して家の方々とともに三番叟まわしを迎えた。

二一 Aさん

一軒目は、明治四〇年創業の造り酒屋である。⁵かつて杜氏と蔵人でにぎわったという大きな建物は、現在では内部の空間のほとんどが使われておらず、がらんとしていた。

香川県観音寺市に生まれたAさん（昭和四年生まれ）が三番叟まわしを初めて見たのは、嫁ぎ先のこの酒蔵で初めて迎えた新年のことだった。その時には「十二時すぎたらばつと来た」という。Aさんにとって舅にあたる二代目は芸事を好み、三番叟まわしの人形や頭を買い集め、毎年の正月に三番叟まわしを迎え

ることを大いに楽しみにしていた。三番叟まわしが終わると、舅は芸人を引き留めて酒を振舞うのが常だった。Aさんは、家の向かいにある豆腐屋に酒のつまみを買に行かされたという。当時のAさん自身には三番叟まわしに特別な関心はなく、年越しの夜に起き続けていなければならないことがただつらかったそう。舅と楽しそうに話している芸人に対して、「もう、早く帰って欲しい」というのが正直な気持ちだったという。

芸事を好んだこの二代目から代替わりが進み、酒蔵はAさんの夫へ、さらにAさんの息子である四代目のYさん（昭和二十七年生まれ）に引き継がれていた。⁶三番叟まわしにやってくる芸人も、いつしか保存会の師匠に代わり、さらに保存会へ引き継がれていた。Aさんの日記によれば、二〇〇一年一月九日の朝九時すぎにやってきた師匠は、この年を最後に「三番叟をやめる」と告げた。翌二〇〇二年には旧正月の当日（二月十二日）に中内と南のふたりが来訪した。この日Aさんは、聞こえてきた鼓の音と、『おめでどうございます』とよく通る声でおっしゃるから、ああ、（三番叟まわしが）おいででくださったな」とすぐにその来訪を悟ったという。

二〇一八年旧正月、朝八時半ごろに「おめでどうございます」という声が聞こえて、中内と南のふたりが表の門から入ってきた。勝手知ったる様子で庭に面した店の間^{みせ}に入ると、Aさんと、息子であるYさんの夫妻に新年の挨拶をかわしながら、中内は背負っていた大きな荷を置いた。それからAさんとYさんと

もに、土間で続いているかつて台所だった奥の部屋に向かった。部屋の柱には神棚が設置されており、ここに三宝荒神（竈神）が祀られている。中内はこれを拝みながら御幣を作る。終わると御幣を供えようとするが、柱の高いところに設置してある神棚まで手が届かず、長身のYさんがこれを受け取り、一年前のものと取り換えた。この間に、店の間では南が鼓を手にして控えている。戻ってきた中内が行李の前にしゃがみ、木偶を手に取ると、南が鼓を打ち、三番叟まわしの始まりとなる。⁷

四体の木偶が代わる代わる舞い、式三番叟からエビス舞までのひとつづきがおよそ六分ほどで演じられる。終わると中内と南が「本日は、おめでどうございます」と祝いの言葉を述べ、AさんとYさん夫妻の頭をエビスの手で撫で、Aさんの腰などをさすった。門の前の駐車場を毎年使わせてもらっていることの礼を述べながら、中内は行李に木偶を手際よくしまい、南は差し出された祝儀を受け取る。中内が荷を背負うと、Yさんは温かい缶コーヒーをふたりに差し入れた。「ようけの福が舞い込んで参りますように」と挨拶をして、中内と南は次の家に向かう。造り酒屋のAさん宅には、立派な門の前に広い駐車スペースがあり、車をここに停めさせてもらうのが常になっている。市街地を廻るときには、ふたりは自動車を適当なところに停めたうえで、近隣の家々を歩いて廻り、ひととおり終わると自動車に戻ってまた次のエリアに移動する。Aさんたちは、朝から門前にふたりの車が止まっていたのを見て、「もう来ている」な

どと話していた。中内たちがこの朝に廻った家は、Aさん宅ですでに八軒目だった。

Yさんの妻（Aさんにとって息子の嫁）は徳島市内の出身であり、Aさんと同じように嫁入り後に三番叟を初めて見て「こんながあるんじゃないかと思つて、びっくりした」という。先代の師匠については、AさんもYさんの妻も、木偶を取めた箱を天秤で担ぎ、足元はゴム長靴という出でたちの「おじいさん」のイメージで語る。三番叟まわしは本来はふたりで行うものであるが、Aさんたちの記憶の中の師匠はひとりで門付けを行っており、鼓を使つていた記憶もないという。

正月にやつてきた師匠に対して「早く帰つてほしいと思つた」と、Aさんは若い頃の気持ちを率直に語つている。他所から嫁入りして事情がよくわからないまま、芸人に肩入れする舅の指示に眠気をこらえながら従い、酒のつまみを買に行かされた、ひとりの若い女性の心情である。三番叟まわしという当時の彼女にとつての異文化の経験が、彼女とは違つてそれを心待ちにして大切に迎える舅の姿と対照的に描写されている。

現在のAさんは、毎年三番叟まわしを迎えることを楽しみにしている。中内と南による三番叟まわしについて、孫の活躍を喜ぶような表情で語り、先代の師匠のころに比べて「にぎやかになった」とその変化を歓迎している。Aさんは、一九五五（昭和三十）年一月二十四日に徳島新聞がこの酒蔵で撮影したモノクロ写真をアルバムに貼つて大切にしている⁸。人形を操る男性

（師匠よりも前の芸人）の前に晴れ着を着た子供たち十数人が集まつており、両手を大きく広げた人形を笑顔で見つめている。人形遣いの顔は、人形が広げた着物の袖に隠れていて見えない。写真には長男Yさん（当時三歳）と長女（七歳）の姿も写つている。先述したように、徳島新聞はこの写真を一九九九年十一月二十二日夕刊の第一面に再掲して、保存会による三番叟まわし「復活」の試みを大きく報じた。Aさんはこの記事を切り抜いて、写真とともに大切に保管している。また、Aさんの舅である二代目が収集した二体の木偶は、Aさんによつて保存会に寄贈され、現在では中学校での伝承教室に活用されている。

毎年の新しいカレンダーが届くと、旧正月の日付を確認することがAさんの習慣になつている。「旧正（旧正月）は今年は二月をだいぶすぎとるなて思つたりしながら、（カレンダーに）印つけといてね。それ覚えとかなんだら思つて。済んだら、やれやれと思う」。嫁いできたばかりの若いころ、「早く帰つて欲しい」としか思わなかつた三番叟まわしを、現在では毎年の大きな楽しみとし、新聞に記事を見つければ丁寧に切り抜いて、保存している。故郷を離れて暮らしている長女からは、「三番叟まわしをテレビで見た」といった連絡があるという。

二二二 Mさん

同じ旧正月当日の昼過ぎに、もう一軒の家を訪ねた。Aさん宅から国道を挟んで一キロメートルほどのところにある、同じ

東みよし町内のMさん（大正十三年生まれ、女性）宅である。Mさんは「耳がすっかり遠くなって」というが、補聴器をつければ会話はスムーズで、昔のこともよく覚えていて。Aさんと同じく、保存会からの紹介でこの前年に訪問し、聞き取りをさせてもらっていた。

この日は息子のTさんも在宅していた。中内と南に加えて、例年とは違って筆者の訪問もあることから、高齢の母親ひとりでは応対が大変だと判断したのだろう。Tさんが自宅で三番叟まわしを迎えるのは、子どものころ以来だという。旧正月は祝日ではないので、平日の日中に三番叟まわしがやってきても、幼稚園や小学校に通う子どもは家にいない。Mさんは、幼いころに三番叟まわしを自分もたしかに見ているはずだが、特に何も覚えていないといい、それはごく最近になるまで「あまり関心がなかったから」だろうという。

玄関から「おめでとうございます」と声がした。例年の訪問は十五時ごろだったが、今年は一時間早まった。Mさん宅では、昨年と一昨年と続けて「ブク（忌服）」であったので、二年ぶりに三番叟まわしを迎えることになっていた。この地域では親族同士が一定の範囲内にまとまって居を構えていることも多いので、ある家で亡くなった人がいた場合に、近隣の親族の家々がまとめてブクとなる。こうして多いときで十軒ほどがまとめてブクとなり、三番叟まわしの訪問時刻がかなりずれることになる。この日に訪問予定の家々もそうで、朝Aさん宅で中内たち

に会った時点で、午後のMさん宅の訪問時刻は例年よりもだいぶ早くなりそうだと言っていた。

玄関に出てふたりを迎えたTさんは、「初めてのことで、要領がわかりませんので」と挨拶し、中内は笑顔で応じた。Aさん宅のときと同じように、まず奥の台所に行つて三玉荒神を拜む。腰が曲がってしまったって機敏に動くことが難しいMさんは、Tさんに対して座布団を中内に出すように指示を飛ばす。台所で三玉荒神を拜もうとしていた中内は、渡された座布団のおかげで⑨面を床にそのまま置かないで済んだ。それから中内は、台所から続く居間で神棚を拜むと、玄関まで戻り、南の鼓に合わせて三番叟まわしを始めた。

Mさんは玄関先に正座で座わり、手を合わせながら実にありがたいという表情で三番叟まわしを見つめ、時折拜むように人形に頭を下げた。千歳、翁に続いて登場する三番叟の人形は、前半の式三番叟のクライマックスにおいて、黒式尉面をつけて神となり、手にした鈴をいつそう激しく打ち鳴らす。続いてエビス舞が始まりエビスが登場すると、Mさんの表情は緩み、にっこりと笑みが浮かんだ。辻本が説明するとおり、三番叟まわしを迎える人々の様子は、三体の人形による前半の式三番叟では「行儀よく、なんだかかしこまって見ている」が、後半にエビスが登場すると表情が打って変わり、リラックスして笑顔になる。これを演じる中内と南の表情も、前半では神事を執り行う厳粛な表情であるが、後半ではエビスの人形とともに柔和

な笑顔になり、詞章の調子も明るくはなやかになる。

三番叟まわしが終わると、「本日は、おめでとうございます」「今年一年も、もつともつと幸せでありますように、病氣などしませんように」「ようけの福が無い込みますように」と中内と南は言い、エビスがMさんの肩、ひざ、腰を丁寧に撫でた。それからMさんがエビスに両手を差し出すと、エビスはその手から福を授けた。息子のTさんにも福を授け、この場には居合わせないTさんの妻子にも「福分けをしてください」と言う。Mさんがついそのまま玄関でふたりと話し込んでしまいそうになったので、Tさんは早く家に戻らうようにと促した。例年のとおり、客間のテーブルには中内と南をもてなすために、おはぎや茶菓子などの接待の用意が整っていた。ふたりの来訪の正確な時間が読み切れない状況で、Mさんたちは時間に余裕をもって、昼食としても間食としても成立するようなもてなしの準備を済ませていたのだった。中内はMさんに感謝の気持ちを伝え、「師匠が、こちらで一緒にお弁当を食べるのを、いつも楽しみにしていました」と語った。Mさんは、かつては師匠にはうどんを準備しててもなしたのだが、「年がたって、うどんの出汁の味をとるのが難しくなったから」と、今年は自身の手料理ではなく近所の方が道の駅に出しているおはぎを用意したのだと説明した。

(中内) いつも、おなかを大きいにさせてもろうて、あり

がとうございます。

(Mさん) 前のおじいちゃん(師匠のこと)は、ほんともう、うちの主人とウマが合うて、二、三軒向こうに行っても、お弁当食べるのに(わざわざ戻って来て)うちに寄ってくれた。「Mさん、ちょっと話しすぎて、今日は三軒(門付けがでぎずに)まあ残るわい」なんて。もうふたり、ほんまウマが合うてな。年いっても喜んで来てくれおった。

(中内) 師匠からも、Mさんのことは何ってました。

師匠の思い出、Mさんの健康のこと、畑の作物の様子、ちょうどこの日にテレビで放映されていた冬季五輪のフィギュアスケートの結果についてなどをあれこれ語らったあと、中内・南が暇を乞うと、MさんはTさんに指示して、準備していた土産の入った袋を渡した。中にはお餅や漬物などがたくさん入っていて、中内は「お子さんあげる『お楽しみ袋』みたい」と喜んで受け取り、Tさんも「母親は」昔から、この調子で」と笑った。

(Mさん) おえびすさんのおかげで、越せます。来年もよろしく願います。おえびすさん待つとるよ。

高齢のMさんを気遣い、中内と南は客間で別れの挨拶を終えたつもりだったが、Mさんはふたりを足早に追いかけて玄関まで出て、正座して頭を下げ、「また来年も来てくださいや。待つちよるきね」と見送った。中内たちは、「なおいっその福が舞い込みますように」とこれに答え、次の廻壇先へ向かった。

もともとMさんの生家は、山地の集落にあった。三番叟まわしの芸人はそこにもやってきて、毎年の正月を告げていたという。自動車での移動ができなかった時代で、芸人がその日の廻壇先から自宅に日帰りすることは難しく、集落の決まった家に泊めてもらうことになっていた。Mさんの生家は、芸人に定宿として頼りにされていた。

子どものうちから、(山の上の)私の里では、毎年(人形遣いが)家で泊まりおった。もうずっと泊まりおった。昔から。それも泊まったら、やっぱり晩に(人形を)まわしてくれおった。特別じゃ、泊まるきじゃろうな。

山の上じゃ、三十軒もあるのが飛び飛びじゃきな。やっぱり泊まらなな。下まではバスで来おったけど、山はもうな、歩いてた。

現在では、市街地でも山間の集落でも、三番叟まわしを家で迎えるのは高齢者であることが多い。そうした家を夜遅くに訪ねるわけにはいかないので、遅くとも夜九時ごろまでにはその

日の門付けを終えなければならない。千軒以上の家で三番叟まわしを披露する中内たちは、時間を意識しながら手際よく移動していく必要がある。それでも各家での舞いをおろそかにすることはなく、一軒ずつ惜しみなく、丁寧廻つていく。高齢者のみの世帯では、デイサービスに出かけていたり、誰かが入院中だったりして、家に誰もいないこともある。そうしたときも、中内たちは誰もいない家の玄関先で、三番叟まわしを神事としてきちんと行う。家が留守であっても、わかる場所に祝儀がきちんと置かれているという。

Mさんは次のように語る。

まわしてくれる人の顔がな、(服喪で)来てくれんでも、目の前に浮かぶ。私はやっぱりこの、おえびすさんの恩があるおかげでこうやって生きておれる。おえびすさんは、(自分から代替わりして)若い衆になつても、来てもらう方がええと思う。おえびすさんが来てくれた年はええ年やと、もうはなから思い込んでるのかな。ほんまええ年じゃ。

三 阿波木偶箱まわしの「継承」と「伝統」

三― 「継承した三番叟まわし」と「復活させた箱まわし」
保存会が活動を開始した一九九五年当時は、史料や小説などの断片的な記述や、人形を制作する人形師の来歴とその作品に

注目した出版物はあっても、ジャーナリズムや民俗学による本格的な調査は行われておらず、阿波木偶箱まわしの体系的な先行研究はなかった。もともと口づてに伝承され、衰退して「滅亡」しかけていた芸を、保存会は師匠に弟子入りして習得することができた。さらに、門付けに訪れた先の家々で丹念な聞き取りを行うなどの調査を継続して、この芸能の歴史を丹念に掘り起こしていった。これは、阿波木偶箱まわしについての情報を可能な限り収集し、体系化して記述する初めての本格的な試みでもあった。

こうした保存会の活動において、「復活」と「継承」という表現は明確に使い分けて用いられている。「芝原生活文化研究所二〇一六」。以下では、こうした表現が意味するものを整理し、そのうえで「復活」「継承」を果たしたこれらふたつとは異なるもうひとつの芸に注目する¹¹⁾。この存在が、三番叟まわしを迎える人々によってどのように語られ、また保存会にとってどのような意味をもつものなのかを考察する。

はじめに述べたように、阿波木偶箱まわしは、ふたつの芸能から主に構成されている。ひとつは「三番叟まわし」であり、もうひとつは「箱廻し」である。三番叟まわしとは既述のとおり、檀那場の家々を一軒ずつ訪問して、四体の人形を用いて門明けの神事を行う祝福芸である。辻本は、この三番叟まわしを阿波木偶箱まわしという芸能の中心と考えており、それが娯楽芸能ではなく「信仰、神事」であって、「受け入れる側の文化」

が存在して初めて成立するものだ¹⁰⁾と強調している。AさんやMさんのような、毎年三番叟まわしを迎えることを心待ちにして、芸人を歓迎する人々、たとえ家を留守にしても祝儀を置いておくような人々があって、三番叟まわしは成立している。これに対して「箱廻し」は、「娯楽芸能」と位置づけられているもので、路傍で演じられた人形芝居、「道の芸」「大道芸」である「芝原生活文化研究所二〇一六・二九」。かつて人形遣いたちは、数体の人形を木箱に入れて移動し、町なかの芝居小屋や農村舞台で演じられた人気の外題を、路傍や民家の庭先、神社境内で演じた。

まだ現役で活動していた「最後の三番叟芸人」を師匠とすることで、保存会は三番叟まわしを直接「継承」することができた。これに対して「箱廻し」は、「太平洋戦争を境に街角から姿を消した」。よって保存会は、資料の収集と分析、聞き取り調査をもとにこれを「復活」させなければならなかった。「芝原生活文化研究所二〇一六・二九」。現在では、中内と南がこれを民俗芸能フェスティバルや人權啓発関連の講演会、その他商業施設でのイベントなど様々な機会に披露している。

「プライドを持っていないと、門付けはやつとられん」と、辻本は語る。神事としての三番叟まわしは、師匠を通じてその伝統を何とか「継承」できた大切なものであり、保存会の現在の活動の要であり、これからも「絶対に変えちゃならん」ものである。これに対して「箱廻し」は「娯楽、芸術」であり、「復活

し、継承した」ものである。「絶対に変えてはならない」という「神事」に対して、「娯楽、芸術」である「箱廻し」は、娯楽や生活の変化によって再び廃れてしまう可能性もある。だから「変えてはならない」ものではなく、「世相に合わせて新しく」していく必要があるのだという。

三―二 もうひとつの門付け――「あの人、どこ行ったん？」

保存会は三番叟まわしを継承し、箱廻しを復活させ、「阿波木偶箱まわし」の再興を実現した。そうした保存会のこれまでのあゆみをまとめた著作の中に、このどちらとも異なるものとして言及され、また三番叟まわしを迎える人々の口からも、ためにがいがちに言葉を選びながら語られるもうひとつの門付けがある。「箱まわし」文化の継承には、社会問題としての差別を克服しなければならぬ」としている保存会にとって、その存在は重要であり、しかしそれを「神事」と「娯楽」のどちらかに位置づけることは難しい。保存会の著作において「エビス舞」「大黒舞」という名称で説明されているのもうひとつの門付けについて、門付けを迎える人々が記憶を頼りに語る物語から考えてみたい。

旧正月の三番叟まわしを迎えた同じ日に、「あの方は、どこ行ったん？おなごの人がな。人形持つてな、来おったんです。あの人、どこ行ったん？」と言って、Mさんは語りだした。筆者と、息子のTさんとの会話の中で、Mさんは言葉を選びなが

らぼつりぼつりと語った。

そう言ったらいかんけど、「お遍路さんじゃ」って（近所の）みなが言いおった。もう、お正月やなんでんなしに、ちよこちよこ来るんよ。これ（＝人形）持つて。こまいお人形持つてきて、まわして。

おえびすさんと違うんよ。こまい木偶じゃわ、おばあさんが持つてきおったんは。遅うにはもう、人形も持つてこんとな、「お遍路さん」に廻りよった。来たら、食べるものをあげるんよな。何のかんのあげよった。こつちがお茶飲みよつたら、「一緒にお茶飲まんね」って、お茶をあげてな。

（筆者）その人は、人形を遣って、三番叟まわしみたいにするんですか？

ちよつとこう、まわしてしたら、みんなが炊いとるものをあげる。それをもろうたら、すつと帰る。遅うにはもう、人形も持たんと来てな。何かをもろうてな、去ねおった。おばあさん、年寄りの女の人がな。

「阿波木偶箱まわし」はかつて、「親たちが口を割らなかつた文化」[辻本 二〇〇八・八二]だった。以前は聞き取り調査をしようにも、「おばあちゃんの家に木偶が残ってないですか」と

は安易には聞けなかったという「辻本 二〇〇八・一〇四」。こうした差別の歴史やそれを経験してきた人々と向き合うことが、「阿波木偶箱まわし」を再興させる活動の原点だった。

淡路で「人形浄瑠璃」を研究したローは、徳島の事例とはまた異なり、淡路では「人形浄瑠璃」に対して明確に区別された「三番叟まわしとエビス廻し」がともに否定的なイメージで語られていたと記述している「ロー 二〇一二・二五二」。「三番叟まわしとエビス廻し」にも関心をもって調査を進めようとした彼女は、それらは「物乞いであり、淡路の伝統の一部だと考えるべきではない」、「伝統のそのような『みっともない』側面ばかりに興味を持つことが本当に残念だ」といった言葉を聞かされたという。

また神野が引用している後藤捷一の記述「後藤 一九三二」には、当時大阪市東淀川区に在住していた後藤の家に「阿波のおえべつさん」が偶然やってきたときの情景が描かれている。やってきたのは十日戎をあてこんで徳島から阪神方面までやってきた「五十歳程の婦人」だった。「エビス」「大黒」などのごく小さな木偶をかかげて、芸とも言えないほどの簡単な動きをさせて歩き、時には阪神方面まで遠征していた人々がいたという記録であり、後藤はこれを「神事」「娯楽」ではなく「物貰い」のひとつとして認識していた「神野 二〇一七・四九」。

保存会はこのような「エビス舞」「大黒舞」を、「徳島県における正月の祝福芸として見落としてはならない民俗芸能」とし

て紹介している。それは「徳島や淡路の正月の街並みを彩った門付けの祝福芸」であったが、三番叟まわしが正月神事として定着したのに対して、「三番叟まわし」と比較して簡易な言わざいであったため、軽視されたまま一九五〇年代に姿を消した「芝原生活文化研究所 二〇一六・四五」。また、「物もらい」と蔑視され、阿波木偶文化のひとつとして認められてきませんでした「辻本 二〇〇八・一〇三」。そうした性質のゆえに、「木偶や門付け周辺用具などの保存資料が極めて少なく、復活伝承することが困難であった」が、「もともと素朴な芸だったこともあって、阿波木偶箱まわし保存会がその演技の『復活』をほぼ実現し、保存活動を行っている」としている「芝原生活文化研究所 二〇一六・四五」。

Mさんの語りは、「マイナスのイメージを飲み込んだ文化」
「辻本 二〇〇八・一〇四」という阿波木偶箱まわしの芸のうちでも、そうした性質がいつそう強い「エビス舞」「大黒舞」の姿を、それを迎える側にいた自分の立場から描写したものであった。かつて自分も「差別する側」にいたのではないかと意識してしまつたからなのか、「そう言つたらいかんけど、「お遍路さんじゃ」ってみなが言いおつた」と語りだしたときのMさんの口調と表情には、ためらいのようなものが感じられた。「おばあさん」が遣つていたという「こまい木偶」は、「おえびすさんとは違う」と認識されているが、もともとエビスの木偶だったものが塗装が落ちたり一部が欠損したりしていたものかもしれない。

「こまい木偶」を遣い、正月とは関係ない時期にもやってきて、「神事」とも「娯楽」とも言い難い芸を披露していた「おばあさん」は、後にはその人形すら手放して、何も持たずに食べ物を貰いにやってきたという。

辻本はその著作において、「エビス舞」「大黒舞」の門付けを実際に行っていたという自身の祖母への追憶を、読み手の心を強く打つ文章でつづっている。また、「エビス舞」「大黒舞」をしながら町を歩く女性の姿をとらえた当時の写真を、著書で章の扉写真として大きく掲載している。「エビス舞」「大黒舞」の資料として示されているその他の写真では、人形を手にしている女性たちの顔は、カメラを意図して避けるかのように不自然に隠れていて、それがどのような人物なのか、どのような表情をしているのかがまったくわからない。「神事」としての三番叟まわしと「娯楽」としての箱廻しという構成の「阿波木偶箱まわし」において、差別の歴史を振り返るうえできわめて重要な存在でありながら、それを体系化しようとするときに位置づけと説明にどうしても困難が伴うことになるのが、「エビス舞」「大黒舞」なのではないか。扱う道具も、また芸としてもごく素朴なものだったからこそ、それを再評価して語りなおすことには、三番叟まわしや箱廻しを語りなおすこととは別の難しさが伴うはずである。

「継承」された三番叟まわしと「復活」した箱廻しは、徳島独特の民俗芸能として再評価され、はなやかな舞台で披露され、

メディアにも大きく報じられるようになった。これ対して、「簡易な言祝ぎ」であり、人形そのほかの道具に対しても工芸品、美術品としての価値を見出しにくい「エビス舞」「大黒舞」は、「復活」をほぼ実現したとされるその一方で、「どこへ行ったのか」わからない存在として語られる。前者がその存在を正當に再評価されていわば「主流化」していく動きとともに、「エビス舞」「大黒舞」の存在はそのままではどうしても「周縁化」してしまい、かつてのその姿から現在に至る連続性が見えにくくなっていく。Mさんが「どこいったん？」と率直な疑問の形で語る「お遍路さん（＝「エビス舞」「大黒舞）」は、再興を果たした「阿波木偶箱まわし」にとって、これからのような存在として、どのように語りなおされていくのだろうか。

おわりに

ある芸能が継承される際に、先代と新しくその担い手となった者との間で、個人的な技量が違っていたり、それぞれを取り囲む環境や時代、伝統の受け止め方が違っていたりするのは当然のことである。「神野 二〇一六・七〇一七三」。そもそも伝統の継承とは、過去をそのままに再現し、その忠実な複製をただ繰り返すことではなく、それよりもはるかに創造的な行為である。三番叟まわしの師匠は当初、中内と南に継承することを従来とは違って彼女たちが「女性だから」という理由でしぶって

いたというが、結果として現在では、かつての三番叟まわしはなかった「にぎやかさ」(Aさん)が彼女たちによって生み出され、それは「阿波木偶箱まわし」の再興を後押しする大きな要因のひとつとなっている。ふたりの毎年の来訪は、檀那場の高齢者たちにとって、まるで孫の成長を見るかのような楽しみとなっている。

単なる過去の複製ではないこうした創造的な過程を経て、「継承した三番叟まわし」と「復活した箱廻し」は阿波独自の民族芸能として再興を果たし、その地位を確立した。ただ、こうしたいわば主流化の流れとともに、そのどちらとも異なる「お遍路さん」のような、せつなく、また懐かしくもある存在は、語ることの難しい存在としていわばかえって周縁化の流れにさらされてしまう。「伝統」といわれるものの生成や再生にはつきものともいえるこうした主流化と周縁化の逆説は、阿波木偶箱まわしの再興の過程ではどのような形で起こるのか、またこの問題に対して、保存会とこの芸能を支えている人々がどのように向き合っていくのかがこれからいっそう注目される。

注

- (1) (芝原生活文化研究所二〇一六、辻本 二〇〇八) および(神野 二〇一七・七三・七四)の説明をもとに、この論考の趣旨に合わせて一部を変更した。
- (2) 最近のものとして、奈良県大和郡山市第四回『水木十五堂賞』

受賞(二〇一六年、辻本顧問に対して)、サントリー文化財団『第三九回サントリー地域文化賞』受賞(二〇一七年)。

- (3) 保存会は、この「最後の三番叟芸人」について、氏名を含めその素性を明かさない方針をとっている。

- (4) JSPS 科研費 P15K03066 (研究者代表・姜竣)。
- (5) 本特集の姜論文における A 家のこと。

- (6) かつて二代目当主のころ、人形遣いは新正月に年が明けるとすぐにやってきたという。本特集の姜論文を参照。

- (7) 三番叟まわしの詞章そのほか具体的な姿については、「友常 二〇一七・二八四―二八五」および映像資料を参照。

- (8) 本特集の姜論文を参照。

- (9) 「黒式尉面」と「白式尉面」。かつて三番叟まわし芸人は、困窮した際に三番叟の人形本体を売却することはあっても、この面は最後まで手放そうとしなかったという。

- (10) 保存会はこれら関連資料についても整理して紹介している。

- (11) 「復活」「継承」という表現に神野もやはり注目し、本論とは違った観点から論じている「神野 二〇一七・七〇」。

- (12) 二〇一七年一月のインタビューより。

- (13) ここで語られた「お遍路さん」とは、本特集の姜論文で論じられている「えべっさん」と同様のものだろう。

参考文献

神野義治「木偶まわしの旅」旅の文化研究所編『旅の民俗シリー

ズ 第二卷『寿ぐ』二〇一七現代書館

姜竣「阿波木偶の伝統と被差別民の漂泊性」関根康正編『ストーリー

ト人類学』二〇一八 風響社

後藤捷一「阿波の恵比須廻し」『郷土研究』六巻二号 一九三二

芝原生活文化研究所『福を運んだ「でこまわし」——阿波木偶箱

まわし保存会20年のあゆみ』二〇一六 芝原生活文化研究所

辻本一英『阿波のでこまわし』二〇〇八 解放出版社

友常勉「門付け芸の精神史——阿波の木偶箱廻しと出雲の大黒人

の詞章・楽曲から」『東京外国語大学論集』八二・二〇一

ロー、ジェーンマリー『神舞い人形・淡路人形伝統の生と死、そ

して再生』二〇一 齊藤智之訳 私家版

映像資料

「阿波木偶箱廻し」調査・伝承推進実行委員会 『徳島県の祝福芸

——阿波木偶「三番更まわし」の門付け記録』二〇二二

「阿波木偶箱廻し」調査・伝承推進実行委員会 『阿波木偶「箱廻

し」資料編』二〇二二

(もりた・よしなり／大阪大学・特任講師)

【シンポジウム「ローカルなもの生き延び方——現代における人形儀礼の再文脈化」

ステイグマのシンボルからアイデ ンテイテイのアイコンへ

——「マレビトの地理」が導く歓待の問い——

姜 竣

はじめに

筆者は、「阿波木偶の伝統と被差別民の漂泊性」という論考において、門付けの人形芝居の再生に焦点を当て、一度消滅しかかった儀礼が現代に復活した過程とその背景を明らかにしつつ、門付けの伝統に対する現今の担い手たちの意識や彼らに対する社会的期待感を、民族誌の手法を用い、地域史の成果を活かして実証的に検証した【姜 二〇一八・二〇一七・三三四】。ジェーンマリー・ローによると、伝統的に人形芝居が果たした儀礼上の役割は、本質的には人形遣いの体制外者としての漂泊性や他者性に負うところが大きかったが、彼らはまさに門付けの伝統ゆえに自らの過去に対して「痛み」や「辛さ」を抱いてきた【ロー 二〇一八・一〇一八】。そして、ご神体であり生きる術であった人形は、ステイグマのシンボルとして封印された。ローの研究に触発された筆者の研究は、自らの過去を隠べいし否定させ